

# 芸術による地域創生～現代舞踊を中心とした考察～

大阪芸術大学 舞台芸術学科 特任講師 河邊 こずえ

本研究において、芸術によって地域への創生を促す企画、とりわけ筆者の専門である舞台芸術にフォーカスを絞り、企画を調査、実現し、その結果を考察した。そして、調査結果を元に、さらに今後、現実的に可能な企画案を確立していくことを目的として研究を進めてきた。

芸術によって地域創生を促す企画は、主に美術館に集中している。今や、地方においても美術館のある地区においては、都心部と同じ様に、企画展が多く開催され、芸術作品に触れる機会が増えている。美術館に足を運ぶ機会は、日本人が芸術と触れ合う「場」として非常に大きな役割を持っている。

地方における美術館の充実と共に、美術館以外の地域そのものを利用した芸術祭も多く調査することができた。今回の研究において調査した芸術祭でいうと、奥能登国際芸術祭、ニューブランシュ KYOTO、広島市現代美術館 Hiroshima MOCA、大地の芸術祭など大規模な芸術祭が多く見られる。これらの芸術祭の大きな特徴は、都心部ではなく、アクセスはあまりよくなく、若者、住人の減少に悩むまさに過疎化する地域にて行われている芸術祭であるということである。そして、アクセスに関係なく、多くの集客者数を打ち出している調査結果が見られた。芸術祭は地域の活性化に大きく作用しているといえる。

しかし、ここで本題である舞台芸術、とりわけ時間の制約を要する分野においてはまだまだ出展数の少ないという結果も見出すことになる。これらの大きな芸術祭の中において多く見られた作品は、建築を中心としたインスタレーション、美術(絵画、彫刻等)、写真、である。つまり時間の制約がなく、いつでも観られるものが中心である。これらの芸術作品のメリットは、空間が確保できれば、展示側も、鑑賞側も時間の制約がなく作品と触れ合うことができるということとなる。大きな芸術祭にとってはひじょうに扱いやすい条件となっている。

しかし、調査を続ける中でデメリットも見出された。これらの作品は、時間の制約がない分、その「場」にたくさんの人々が集うという事には乏しい。つまり、地域そのものへの集客は可能であるが、その場において人と人とが直接コミュニケーションをとるということにおいては乏しく感じられた。筆者は、過疎化する地域の人々と、訪れる人々とが交流し、地域の人々の声を知ってもらうことが、過疎化する地域を創生していく核心に迫ると考えている。

既存する企画調査を元に、舞台芸術と、地域においてどのようなアプローチが可能なのか、聞き込み調査も踏まえて実際に企画を行った。今回企画を実践した地域は沖縄県石垣島である。様々な地区において聞き込み調査を行い、その地域の持つ問題などを見出していった。その中でも特に注目したのが石垣島であった。令和 5 年度において人口 49,955 人である石垣島、調査を進めていくと、この数年人口が増加傾向にある。現地調査をさらに進めると、出生率が日本一高いデータとなった。そしてさらに離婚率も全国の中で一番高いデータとなった。そしてそ

のデータを調査していくうちに、ひとり親家庭が非常に多いことが見出される。ひとり親であると共に兄弟が多く、子供の面倒を見られない家庭が多く存在している。筆者はホットステーションの方から聞き込み調査を行った。学校が終わった後、宿題、ごはんなどを済ませて家まで送り届ける。中には家でお風呂にいられてもらってない子供もいる。様々な問題からネグレクトを起こす親も多数存在するという。勿論その子供たちは休日も遊びに連れていってもらえない。つまり前述した例で言う、美術館にいくら素晴らしい展示が訪れたとしても鑑賞することができない環境にある。

ホットステーションの人々、地域の人々はこれらの問題に取り組むべく、色々なイベントを行っていた。例えば、石垣島パレードという地区のお祭りに、子供たちとダンスなど練習して参加、ハロウィンにはお化け屋敷を共に製作する事などを行っていた。ホットステーションの人々、地域の人々の力によってお化け屋敷は 2022 年、500 人の集客を得ていた。ここで筆者は、人と人とが集う「場」として、このイベントに舞台芸術をとり入れる事に至る。

2023 年 10 月 29 日石垣市民会館において行われた、ハロウィンのイベントにおいて、プロのダンサー 3 名、衣装デザイナー 1 名にてパフォーマンスを行った。これまで 500 人集っていたイベントに、1,000 人の集客結果を残すことができた。そして、その 90%以上が現地の人々であった。普段親子で出かけることのない親子が、企画をきっかけに出かけ、芸術を鑑賞したという声も聞くことができた。本企画は今回の成果を踏まえ、すでに来年度も企画が決定しており、自治体やホットステーションの人々と協力し、今年 2024 年 10 月は石垣市民ホール中ホールにて照明なども踏まえて舞台を上演、地域の人々に観劇する「場」を提供することを企画している。また、今年は子供たちにもワークショップを行い、実際に舞台を創り、舞台に立つ企画も考えている。

筆者は本調査において、これまで知らなかった石垣島の抱える問題について直面した。これまでの調査において、既存する芸術祭の多くが過疎化する地域へのアプローチであった。しかし、本研究を進める中で、それぞれの地区が抱える様々な問題をさらに見出して、アプローチしていく必要性を感じた。一時期の商業的な集客のみならず、地域の人々の抱える問題に向き合い、芸術を必要としている人々が、芸術を鑑賞することが可能な企画を実践することが重要であると考えている。そして、美術館のみならず、すべての環境にいる人々が自然と芸術に触れ、人と人との交流を持つ「場」そのためには、空間芸術のみならず、時間を共に共有する舞台芸術が効果的である。プロの作品を誰かと共に鑑賞する「場」、プロと共に芸術作品を創る「場」、両方の側面新しいコミュニティの可能性があると見える。筆者は本研究を元にさらに 2024 年度においても、研究を深めていく所存である。